

▽変わった出し物

第二夜は、栄町市場の居酒屋に決めた。「今日はハシゴしないで、早く引き上げましょうね」とあらかじめ予防線を張っておく。

土曜の夜は、市場は静かなもの。開いていた数軒の居酒屋を外からのぞいて「当たりか外れかわからな

いけど」と、とある居酒屋に腰を落ち着けた。
観光客や若者の酔客は見当たらないが、カウンスラー席にいる大柄なおじさんがどうも気になる。とにかく声が大きい。「声が大きい人の話って、たいてい中身がないよね」とオギカンさ

んに目を向けると、「なんだ。オレのことか?」とムツとする。当たらずとも遠からずと言いたるところだが、それ以上の言及は避け

る。
気がつく、隣のテーブルに大きなペットボトル飲料が次々と運ばれてきた。予約客でもどつと来るの

だろうかと思っていると、今度は店員が3人がかりで大

忘れられた歴史の場

観光地と化した霊場

振り返ってみると、ちょっと真面目すぎる修学旅行的なコースだったかなあ。でも嘉数高台や道の駅「かでな」は「基地オキナワ」を、座間味島の集団自決の現場は「いくさ場沖縄」を、そして斎場御獄(せーふあうたき)は「霊場の島琉球」をお二人に見せたかった。

嘉数高台は3回目だが、奥村長老と訪ねた時と同様、土曜日とあってお目当てのオスプレイは滑走路上

で駐機したまま。嘉手納も同様、爆音ひとつ聞けない「静かな基地」だった。座間味島は、村中心部は観光客で賑わっていたが、ちょっと離れた平和の塔や集団自決の場は、われわれ以外には観光客のいない、忘れられた歴史の場になっていた。

それにひきかえ、連休の観光客で賑わっていたのは斎場御獄。ここも3度目だ

らくすると、どこから調達したのか、小さめの冷蔵庫が運び込まれた。隣のテーブルのペットボトルは片づけられて一件落着。変わった出し物に、落ち着かない一夜となった。

▽ハイペースにギョツ

第三夜、前夜の仕切り直して再び栄町市場へ。いかにも地元の人という感じの数組が店の表で飲んでい

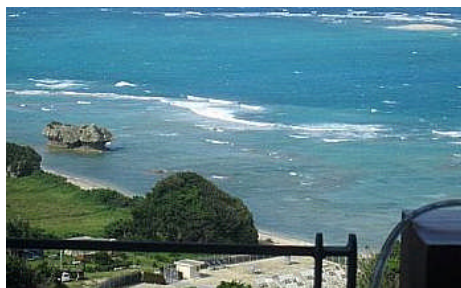
る、アグー専門の居酒屋で戦闘開始。「泡盛ジョッキ250円」の手書きメニューが目飛び込む。それより100円高いが、「久米仙古酒ジョッキ350円」で乾杯。一口ふくむと、か

なり濃いなど感じる。「こじユースじゃないの?」と言いたくなる東京のサワーなんぞと大違いだ。しつかりとしたアルコールを舌が感じる。

なのに、あろうことか、長老の八幡さんは、ぐいぐい飲んで、あつという間にジョッキを空にしてしまった。「全然強くないよ、これ」「ウツソオー! かなり強いですよ。ねえ、オギカンさん」「うん、濃いな、これ」

長老は、我々の心配をよそに、2杯、3杯とハイペースで空けていく。こちらもつられて2杯、3杯。やがて「2時ラスト」と

ら単なる観光地が変わっていった。
八幡さんが「こんな所?」と少し白けていたように、



斎場御獄から見た知念海岸

小生も以前来た時のような神さびた感じを受けなかった。地元の南城市でもマナー無視の観光客対策として、本来の男子禁制を検討し始めたという。

気付いたらまだらボケ

「荻原さん、ぼくは毎日新聞出身ではありませんよ」。二次会の居酒屋で、中川克史支局長に旧知の毎日記者の話をしていたら、突然そう言われた。えっ!

?ずーっと「中川さんは毎日出身」と思っていた。どうしてそう思いこんでいたのか分からないが、八幡さ

宣言するオギカンさんの声とともに、三線の音色が聞こえてくる。気がつけば、竜宮通りの「群星」にたどり着いている3人。「金曜日だけライブをしている」と言っていた上原青年が、なぜか日曜日のこの日もいて、宮里ママが泡盛をグラスに注いでくれる。あとは

大山哲さんが来年信州へ

ホットケイ会が歓迎準備

「美咲」で大山哲、東金城箭一、平良知二の各氏らと飲んでいるとき、大山さんが突然「ぼくは8年も本土へ行っていないけど、来年、信州に行きたいと思ってい

る。松代・大本営跡と満蒙開拓団の村に」と言い出した。哲ちゃんがそんな希望を持っていないなんて。翌日、彼をどうもてなすかという話になったとき、久貝介護士が「それはホットケイ会がやらなくてはい」と提案した。そうか、あまり大勢で行動するよりい

いか。八幡長老、荻原中老も賛成。残留組の富田長老、原中老にも賛同を求めるところにした。帰宅してカミさんに話すと「それならウチにも泊まってもらいましょう。来年までに体を鍛え直そう」

ご同輩、これから1年かけて大山先生の歓迎スケジュールを練りましょう。(荻原莞二)

よ。心配しなくて大丈夫。進んでいません(富)